

ショーペンハウアーが用いる「イデア」の二つの規定---超越論的役割と理想的性格

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程 末田圭果

ショーペンハウアーの哲学を超越論的に読み解くという立場を、鎌田康男が示して以降、日本のショーペンハウアー研究においては、ショーペンハウアーの認識論を基に彼の哲学並びに倫理学を解釈することが試みられてきた。そしてその解釈には、私たちの経験の成立の可能性の条件を問うという視座から彼の哲学並びに倫理学を考察することが求められるため、認識論の整合性が鍵となる。とはいえこの超越論的解釈に基づいたショーペンハウアーの認識論にも問題がないわけではない。本発表では、ショーペンハウアー認識論の重要な要素である、「イデア」の抱える問題について整理し、その問題の解決を試みる。

さてショーペンハウアーはイデアをプラトンに倣って個物の模範として導入する。しかし同時にイデアは物自体の直接的な、適切な客体性とされ、現象の側に配される。更に鎌田はショーペンハウアーがこのイデアに「標準直観」としての機能を与えていることから、イデアの超越論的働きを指摘する。標準直観とは、あらゆる経験に基準を与え、それゆえ個々の表象の汎通的規定性と、概念にもある包括性を合わせ持つ図形と数のことであり、個々のあらゆる現象の形式(Form)である。つまりイデアは個々の表象認識を可能にする「原型」としての超越論的機能を与えられている。

ではこのイデアが懐胎する問題とは何か。まずショーペンハウアーによれば、イデアの可能性の条件は、想像力(Phantasia)と理性の協働である。この想像力は意志の働きであり、認識主観にかつて現在したことのある表象を強制的に繰り返すことができる。すなわち標準直観としてのイデアとは、過去に認識された表象が意志によって再現され、その表象に理性の働きが加わることで可能になる表象ということになる。以上の規定によれば、標準直観としてのイデアは、イデアでありながら、経験によってその内容を充実していくものだと特徴付けられる。そしてこのような規定は、当然永遠不変のプラトンのイデアとは相容れない。ショーペンハウアー哲学を超越論的に解釈する先行研究においても両者のいずれを支持するかは分かれる。このプラトンのイデアと、標準直観としてのイデアの両規定を整合的に解釈するというのが本発表の目的である。

行論は以下のように進める。まずショーペンハウアーの主著『意志と表象としての世界』と、学位論文に基づいて、ショーペンハウアーによるイデアの規定と、認識論におけるイデアの標準直観としての機能を提示する(第1節)。次にショーペンハウアー哲学の超越論的解釈を認める先行研究における、イデア理解を確認する。イデアの経験による可変性を認める(標準直観としてのイデアを支持する)と立場と、イデアの永遠不変性を支持する立場の主張を概観する(第2節)。最後にイデアの二つの規定を整合的に解釈するためには、イデアによる認識と、イデアを認識することは異なることを明らかにする。つまり私たちの認識において標準直観として機能しているとされるイデアは、これまでの経験の中で獲得された、個物の模範としての暫定的なイデアであり、このイデアは永遠不変の(理想的)プラトンのイデアに近似していくということだ(第3節)。本発表の結論に従えば、イデアの超越論的機能と、理想的に要請されるイデアを整合的に解釈できる。そしてこれは、ショーペンハウアーの認識論の整理の一助となり、ひいては彼の哲学の超越論的解釈に資するものである。